



きて実感しました。八月六日八時十五分、多くのテレビチャンネルでは日常と変わらず番組が放送され、私にとって特別だった一日は普段と変わらない一日へと変化していきました。地域によって温度差が生じていること、まさに、今の日本も同じ状況に置かれていると思います。世界では今この瞬間にも、争いにより多くの命が奪われています。

私は被爆四世です。曾祖母は今年で百歳を迎え、今も平和記念公園から二kmほど離れた場所に住んでいます。曾祖母は今も元気で、話すことが好きで品があり、暗い印象はなく被曝にあったとは想像もつきません。原子爆弾が落ちた時、曾祖母は二十一歳でした。彼女は変わり果てた街の中を歩き、家へと辿り着いたそうです。今でも、助けを求める女性の声、原子爆弾により焼け焦げ、トマトのように膨らんだ顔、溶けた皮膚、そして終戦後沢山の死体が山積みになれていたことを鮮明に覚えていてそうです。曾祖母が当時のこと

を語ることはほとんどないですが、彼女の心の中には、一生負わなければならない心の傷跡が残っています。犠牲になるのは一般市民です。一瞬にして日常が奪われ、一生消えな  
い心の傷を負わされるのです。そして今でも  
なお、ウクライナでは希望の光が見えること  
のない戦争が続き、スーダンでは、内戦が勃  
発しています。沢山の命が奪われ、多くの人が  
が故郷を去らなければならない状況に置かれ  
ています。世界中のほとんどの人が平和を願  
っているはずなのに、なぜ。私は問いかけて  
みます。平和な世界を創るために行動してい  
ますか。多くの人が理由をつけて「いいえ」  
と答えるでしょう。平和を願うだけでは何も  
変わりません。戦争の悲しみへの同情は誰で  
もできません。戦争を生み出すのも人間、平和  
を祈るのも人間です。戦争を始めた者は「私  
は平和な社会を築くために行ったのです」と  
正当化するでしょう。私からすると戦争なん  
て平和のかけらもありません。しかし、彼ら

